随想三題

魚模様、人間模様

米谷　昌子
〈写真家〉

須磨水族園の魚を撮るため、この半年ほど何度も通うようになった。当初、ふだん人間臭い所ばかり撮っている自分が、果たして水族館という人工的な空間で撮れるのかどうか心配だった。

しかし、考えてみれば海に潜って大自然の魚たちを撮るなどという方がよほど日常性からかけ離れすぎてピンと来ないところだが、水族館はどことなく日常生活圏内の場所というかんじがした。そういう意味で非常に面白い空間ではないかと思うようになった。

魚たちが狭い水槽の中で、隣人（隣魚？）の顔も知らずに蛍光灯の下で暮らしていることは可哀そうとも思えるが、その不健康さがなぜか身近に感じられるし、まるで魚の集合住宅とでもいうのか、長屋といった風情で面白い。

また、水族館にやって来る人たちからも色々な事が感じとれる。大部分の人が特別な目的意識もなく、思いつきでブラッとやって来る所に面白みがあるようだ。

中年のおばさんたちは生活密着型で、「一匹なんぼ」といった調子でどの魚も値段に換算してしまう。イセエビやチョウザメの前からはしばらく離れようとしない。

若い女性などはサンゴ礁の魚を前にして、

「ほら、あの魚この前サイパンで潜った時おったやん」

と、つい見栄を張って大きな声で言ってしまう。

家族サービスで来たものの、間が持たないのかひたすら8ミリビデオを回している若いお父さんの姿は哀しげだ。

魚もろくに見ず、生徒のスカート丈に目を光らせる女子高の風紀の先生には驚いた。

「いやぁ、私の田舎の奄美大島の魚がこんなにいっぱいおるわ」

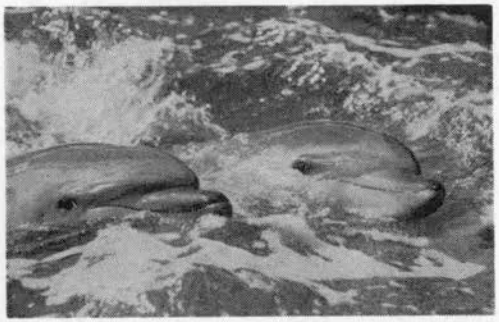
と、サンゴ礁の魚を見て感激するおばあさんのように故郷の海を懐かしむ人もいる。

「ぽっけえ大きなカブトガニじゃのう」

と、思わず故郷なまりになるおじさんもいた。

魚たちの暮らしを見るための水族館で、人の暮らしの一端までも見たような気がしてしまう。

水槽の魚たちは、人間という生きもののこんな光景を、毎日ガラス越しに見物しているのかもしれない。



ちょっと人間を観察!!

「いるいるいるか」
長征社刊1300円

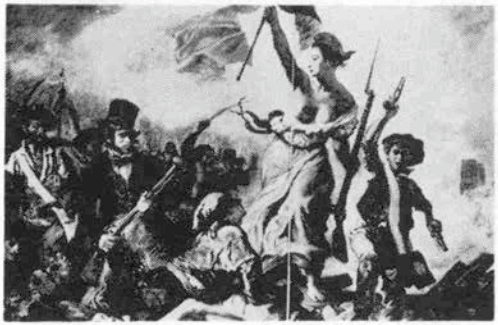
随想三題

フランス革命二百周年

大浦　康介
〈京都大学助教授〉

フランスは今、革命二百周年で沸き返っている。と言っても今年は未だ渡仏していないので、沸き返っているものと想像するということなのだが、実際、各種のイベントやシンポジウムの企画、雑誌の特集ひいてはマスコミ全般の取り上げ方などを見ても、相当な熱の入れようであることは分かる。ハイライトは言うまでもなく七月十四日のパリ祭だが、それに先立って、今年はエッフェル塔建立の百周年でもあるので（この塔は革命百周年を記念して建てられたものなので当然そうなるのだが）こちらの方でも一大記念行事が企画されている。シャンゼリゼ大通りでの軍隊パレードをメイン・イベントとする前者は国側、即ち大統領主導で行われ、一方大がかりな花火の打上げなどが予定されているらしい後者はパリ市の主催なので、ここでもミッテラン・シラクという保革両陣営の領袖の「対決」が見られ、それは既に例えば外国要人の招待客選びの過程などで火花を散らしているらしい。両者にとって、ここは大きな「見せ場」であるからだ。まことに今のフランスらしいという気がする。

周知のように、フランス革命二百周年を祝うのは何もフランス人だけではない。規模の差はあれ日本でも、革命の専門家や十八世紀学者はシンポジウムを開いたり、テレビの教養講座で革命を論じたりするし、一方巷では革命グッズなるTシャツや時計が売られていたりする。フランス革命のこの「取っつき易さ」、堅く言えば普遍性は一体何なのだろう。確かにフランス革命は大げさではなく「人類共有の財産」という様相を有している。それは、アメリカの独立やロシア革命や明治維新などと比べてみれば明らかだろう。フランスという国にとってそれは何よりもまず共和政の原点であり近代国家フランスの出発点であろうが、我々「地球の住民」にとってそれは、我々には最早当り前のことになっているにも拘らず未だ到る所で踏みにじられている〈人権〉や〈自由〉の代名詞であるはずだ。



民衆を導く自由の女神（ドラクロワ）

フランス革命の現実は確かに複雑である。それは大量殺戮も引き起こしたし、良い意味でも悪い意味でも極めて人間臭い革命だった。しかし少なくとも確かなことは、そこには、今日の我々がめまぐるしい日常の中で見失いがちな、生の営みに根ざした基本的な欲求や個人と社会との関わり、政治参加などについての真摯な問いかけがあったということである。この「政治不信」の時代にもう一度フランス革命を振り返ってみるのも無駄ではないに違いない。

随想三題

今藤長之と常磐津小清の「こんせーる　双澍（そうじゅ）」に想う

龍城　正明
〈同志社大学文学部助教授〉

今藤長之と常磐津小清が、二人の演奏会を開くということになった。邦楽会の中でも長唄と常磐津という異例の顔合せである。また男性と女性のコンサートであり、当世風にいうならば「ジョイントコンサート」というところか。ほかにも興味ある点が多々ある。

二人の共通の知人として、私がこの会のネーミングと企画をたのまれた。まず頭に浮かんだのはやはり二人という点からの「双」。これには「双樹」という万葉の時代からのきれいなことばがある。しかし、単に仲の好い「樹」ではいけない。時には激しくぶつかりあい、それでお互いの芸を磨く、その精神が必要である。二人にすれば自分達で思う存分唄って、語れる「気ままな会」をというのが本心らしいが、どのような機会も大切にしなければいけない。今の日本には邦楽をはじめとする種々の伝統芸術こそ時空を越えて広めていく必要がある。日本舞踊と邦楽を愛する私としては、この二人にその夢を託したい。

そこで、「樹」の字にこだわってみた。諸橋『大漢和辞典』をひもとく。辞典とはやはり言葉の宝庫。意に添った漢字が見つかった。

「澍」―ほどよい時に降って万物をうるおす雨。うるおう。又、ます。そそぐ。―とある。

このようなほどよい活力を邦楽界に与え、さらには我われの生活を潤してくれる存在に成長してくれることを願って、今藤長之と常磐津小清二人の会を「こんせーる双澍」とネーミングした。

左より打ち合せ中の長之・小清・龍城さん

実はこの二人、「昭和」との決別の年に東京と芦屋で演奏会を開いている。それぞれが第一回目のリサイタルとして。もちろんそれは回を重ねることになろうが、それとは別に新しい年、「平成」に第一回目のジョイントコンサート開催の運びとなった。今回のプログラムも常磐津と長唄という、ふたつのジャンルがうまく運ぶようにお互いに共通性のある題材を選んだ。常磐津は「戻橋」、長唄は「網館の段」。例の茨木童子と渡辺の綱の物語であるが、これが常磐津、長唄で前後編として完結する。

二人にとって新しい年に、新しい世界への解纜である。二人の新しい船はそのともづなを八月五日に解かれようとしている。その準備に日夜余念のない二人であるが、おおいなる声援を送りたい。

編集部注　常磐津小清師は龍城正明氏夫人である。

地域文化論

〈その119〉

郷土の誇りをつくる 福井県立博物館

嶋田　勝次〈神戸大学建築学科教授〉

北陸の雪の調査に合わせて冬の福井に出掛けて来た。福井は亡父のふるさとであり、戦争中に田舎へと疎開をしたのに、この土地でも戦災に逢うなんて思いもかけないことであった。空襲で市街地は壊滅状態になり、親類は霧散して故郷の拠点はなくなってしまったので、福井といっても、ちょっと知っていた都市へ出掛けるだけという感じになってしまっていた。その福井へ何年か振りで訪ねて来た。この何年か前の一九八四年三月福井治県百年を記念して新築された当博物館の建築業協会（BCS）賞を選定する審査員の一人として出来上ったばかりの建築を拝見出来たのだが、今回もそんなに変らない姿を見せてくれた。

福井駅から北へ車で十分位の、市街地を抜けた閑静なところに位置していて、整備されたばかりの幾久運動公園の北側に当っている。

地下一階、地上二階の、低層にひろがるこの建築は、開放性と閉鎖性の空間の組み合わせが流れのリズムをつくり、分節効果と流続性をうまくつくり出している。

広い公園の入口から広い階段を何段か上り、口の字型の建物に囲まれた中庭を通り、外部空間の変化を楽しみながら進むと、玄関に達するが、ロビーから吹抜や階段やギャラリーへの内部空間も豊かであり、いずれもたくみな空間構成となっている。

二階の常設展示室は、自然・歴史・産業・民俗の部門に分けられ、それぞれの展示については何年かの蓄積の成果が見事である。自由な動線配置もよく工夫され、ビデオライブラリーやガイドウォールが鑑賞者のいろいろな段階にていねいにこたえている。

展示諸室に設けられた休憩コーナーは、内外交流の簡単なうるおいある空間を提供するきめの細かさが現れている。

外壁は、全面に暖か味のあるグレーの色彩一色の二丁掛タイルが貼られている。このタイルの表面に簡単な横線が入れられ、そこで堅張りの壁面全体が微妙な深味をつくり出すものとなり、独特の風格を築いている。

▲福井県立博物館

外壁のデザインは、水平線を強調するさまざまな工夫と共に、太い柱型やらせん階段などによるアクセントが、落着いた表情をつくるものともなっている。

建築の周辺は、城の濠のような緑の帯の他、ゆったりした緑化が十分行なわれ、公園との連帯感と共に領域区分を感じさせる。

建築空間のいろいろなコンセプトを駆使して、内部に対しても外部に対しても質の高い豊かな空間づくりを、論理的にも整理してアッピールして、福井県のシンボルとして長く郷土に誇りをもって愛される存在となって行く意義は大きい。

ひとつの都市の歴史は、長い人生の生きざまを示しているようにも思えて来る。

当博物館の歴史紹介の中に「戦火と震災」の部門があったが、昭和二十年七月の戦火と二十三年六月の震災という不幸なダブルのダメージから立ち直って、今日の近代都市に再興して来た中に、北陸の粘り強いエネルギーが見える。

今藤長之と常磐津小清の

こんせーる 双樹 その1

時　平成元年 8月5日（土）
午後 2時開演

ところ　ＪＲ芦屋駅前ラポルテ本館３階
山村サロン
ＴＥＬ0797－38－2585

演奏曲目

長唄　秋の色種
常磐津　炭橋
長唄　綱館之段

出演者

助演　芳村伊十七
杵屋六昶
杵屋禄三
杵屋禄宣
今藤美治郎
常磐津美佐季

今藤長之
常磐津小清

同志社大学文学部助教授
監修　龍城正明　後援　月刊 神戸っ子

入場ご希望の方は下記へお申し込み下さい

〒164 東京都中野区中野6-27-211 (TEL 03-362-0721)　今藤長之
〒659 芦屋市三条町13-9 (TEL0797-32-0513)　常磐津小清

■大和楽・師籍三十五周年記念

大和三千世の会

平成元年8月2日（水）
午前11時30分開場
12時開演～午後7時終演
新神戸オリエンタル劇場
☎078(291)1100
入場料／5,000円
〈自由席〉

大和楽二世家元
大和久満

大和楽理事長
大和三千世

特別出演／深水流家元／深水美智雪こと
朝丘雪路

二代目家元　大和久満
大和秀
大和静
大和左京
大和郁子
大和宏
大和左幸
大和礼子
地引佐智子
大和三千世
友情出演
西川壽之助
花柳芳恵一子
二代目
若柳吉金吾
特別出演
深水流家元
深水美智雪こと
朝丘雪路

主催／大和三千世の会

〒650 神戸市中央区中山手通7丁目1-15☎神戸078(341)3653
〒160 東京都新宿区若葉1丁目7-1若葉マンション508号☎東京03(353)4740

プレイガイド／新神戸オリエンタル劇場☎291-1100／神戸国際会館☎251-8161
さんちかプレイガイド☎332-1570／神戸文化ホール☎351-3535

神戸市、初の小磯良平美術館（仮称）建設へ（記念）

□故小磯良平画伯の作品2千点とアトリエを遺族が神戸市に寄贈

昨年十二月十四日、八十五歳で亡くなられた洋画家で文化勲章受賞者、また本誌の表紙絵を二十八年間、飾った小磯良平画伯の、代表作「二人の少女」など油絵や、未公開のデッサンなど作品二千点と、御影の自宅アトリエを、神戸市に寄贈されることを遺族が決断され、六月十四日宮崎辰雄市長に遺族から目録と、代表作などを手渡す贈呈式が行われた。

神戸市の三階ホールに飾られた代表作は、画伯の長女沢村嘉子さん(五五)と、嘉納邦子さん(五三)が、当時十歳と十二歳の姉妹を愛情込めて描いた「二人の少女」(一九四六年)を中央に、画伯が東京美術学校（現東京芸大）在学中の若き小磯良平の自画像（一九二六年）と、故貞江夫人を描いた「K夫人像」（一九四七年）が両隣りに置かれ、画伯のファミリーが揃うという、遺族の画伯への愛がほのぼのと漂よう贈呈式の作品展示で、他にも「バレリーナ」など数点が披露された。

宮崎辰雄市長に、沢村・嘉納の両姉妹が、代表作「二人の少女」と目録を手渡す贈呈式を終えた後、長女の沢村さんは「美術品は、保管の上でも個人で持ち続けることは不可能に近いことでして、神戸市が良い形で遺してくださるとのことで大変嬉しく思っております」と話った。

嘉納さんは

「ともかくほっとしました。父は生前、僕が死んだら作品は寄附をしてほしい、気に入らないのは焼くようにと申しておりましたので、一番いい方法になったと思います。〝二人の少女〟は、父が手放さなかった愛着の深い作品で、私達も手許に置いておきたい作品ばかりなのですが、父が永年お世話になった神戸市に寄贈して、多くの方々に見ていただく方がいいと考えましたので」と、感慨深げに話された。画伯の弟子、石阪春生さんは

「遺族が寄贈された作品の中には、小磯先生が、大作を描かれるための沢山のデッサンを描かれており、西洋の画家たちが、油絵の作品を作る上で数多くのデッサンを手がけたように先生も、オーソドックスにその手法をふまえて作品づくりをされていたのです。だから、画家の制作過程を知る人間のドラマのような作品展示が出来ればと思いますね」と。宮崎辰雄市長は、

「今度つくる美術館は、完成品だけでなく、デッサンも展示することで、小磯芸術の制作過程と、その真髄を見ていただけることになるでしょう。それから僕は、小磯さんから友人の竹中郁画伯を描いた初期の代表作品『彼の休息』に描かれているマネの画集のことを聞いていて、それもそのまま残っておりご寄附いただけるそうなので感慨深いですね。できるだけ早い時期に市民に見てもらえる機会をつくりたいし、美術館づくりは、小磯作品のことがよく判る石阪画伯のアドバイスをいただきながら、

実行委員会のようなものをつくって建てたいですね」

寄贈されたものは、自宅に残された油彩七十点、デッサン三百五十二点、版画百五十点、ブックワーク（さし絵、装画、カット）千百六点などで、「二人の少女」「自画像」「K夫人像」のほか、最晩年作「御影の風景」（一九八六年）なども含まれている。

一九六一年から翌年にかけ、朝日新聞に連載され、人気を呼びながら行方が分らなくなっていた川端康成の「古都」のさし絵の原画も。特に、デッサンは、初期から晩年まで生涯にわたっている。

また、御影のアトリエは、自宅と棟続きの木造平屋（九十平方米）で、北窓の光線が入る中で、午前中モデルを眺めては、毎日、絵の虫のように絵筆を動かされたあの風景が想い出されるが、絵の具やキャンパス、書棚、人形たちなども創作にあたっていた雰囲気そのままで寄贈される。

そして、二年後を目標に「小磯記念美術館」（仮称）が建設されると、神戸市初の美術館が出来ることになる。

宮崎市長に遺作を寄贈する沢村、嘉納姉妹

文化都市、ファッション都市といいつつ市立美術館も皆無だった神戸市にとって、世界に誇る「小磯良平美術館」の建設は、神戸市民にとって何よりも誇らしく、喜ばしいことである。

贈呈式を終えた後、次女の邦子さんは私にこう言った

「記者の方に美術館を建てる上でのご要望はといわれたけれど、どうしてもいえなかったことがあるのよ。建てる時に、兵庫県の近代美術館にある作品も一緒にして〝いい美術館〟を作ってほしいんだけど…。県がそれをやって下さったら父にとっても一番嬉しいことだと思うんだけどね」

胸につかえている言葉は、純粋な父への愛情を感じた。

その後、兵庫県の近代美術館へ四百数点が寄贈されたことが記事になった。が、兵庫県の近代美術館の中での小磯良平画伯の作品展示方法には、小磯画伯に少々お気の毒な所があるのも事実である。いづれにしても、近代美術館の金井元彦館長は、同窓のご友人。

神戸市民は兵庫県民でもある。

出来得れば、この機にセクトを越えて、故小磯良平画伯のスケールある世界的な「小磯良平美術館」が開けないものだろうか。ポンピドーのような芸術センターを、兵庫県は西宮市に設置するそうだ。そして、神戸には、兵庫県立近代美術館が長い歴史を持って、堂々と評価を得ているのである。残念ながら神戸市にはいまだ市立の美術館さえないのである。神戸市の名誉市民だった小磯良平画伯。邦子さんのひとり言を、あえて文章にし、お願いするのは、純粋に〝いい美術館〟の開館を待ちたいからである。また、神戸市内に二カ所小磯作品がわかれるのもいかがなものだろうか。

「月刊神戸っ子」も二十八年間小磯画伯の表紙で、神戸のいいイメージを創り続けていただいた。

そんな神戸のイメージのためにも、「小磯（記念）美術館」のスケールある内容の作品コレクションに期待をかけたい。

（小泉美喜子）

●れんさいエッセイ●ペンのうちそと●26

かけそばと白い犬

三枝和子〈作家〉え・元永定正

「一杯のかけそば」が大変なブームらしいと聞いたのは、つい、先だってのことである。先だってというのは、五月半ばである。

何ごとによらず、流行というと必ず遅れをとる私のこと、行きつけのスナックで、きょとんとしていたら、周りがいっせいに説明してくれた。

昨年の大みそかに、さるラジオ放送でひそやかに流したのが、人から人へ、口から口へと伝わって大変な人気。最近では作者も週刊誌に登場しているらしい。

しかし、私のように疎いのもその場に三、四人いて、「何だ、何だ」と騒ぐので、ママさんが、誰かが置いていった、とコピーを出して来た。見ると、原稿用紙にして、二十枚くらいのものだろうか。回し読みするよりは、と、なかの一人が朗読を始めたが、これが下手くそで私が代った。自慢じゃないが、私は文章の初見（こんなものを初見というか、どうか知らないが、ピアニストなどが、初めて楽譜を渡されて、その場で弾く、その初見になぞらえて言っているのです）が得意である。かなりの早口で文意を正確に伝えながら読む特技がある。

ある大みそかの夜、北海道（札幌だったか）のある町でのお話。店じまい寸前になって母親と二人の男の子が入って来て、一杯のかけそばを注文した。三人で一杯のかけそば？　主人は不審に思ったが、何か事情のありそうな母子連れだ。二杯を恵むのも相手が気を遣うだろうと大盛りにしてあげた。その翌年も母子連れはやって来て、やはり一杯のかけそばを注文した。その翌年も…主人は母子連れのために席をあけて待った。こうしたことが何回か続き、ある年から、ふっつり母子連れは来なくなった。そして、十年だったか、正確な歳月は忘れたが、とにかく、立派に成人した息子たち（長男の方は大学の医学部に入っている）がやって来る……、とこのあたりで、だんだん私は気持が滅入って来て、読みかたがクールを通りこして投げやりになって行くのが自分でも分った。

ようやく読み終えると、私と同様、この作品（作品かなあ？）に初めて出会った文学青年が感に堪えぬように溜息をついた。

「分ったあ。これで、おれの小説の売れないわけが分ったあ」

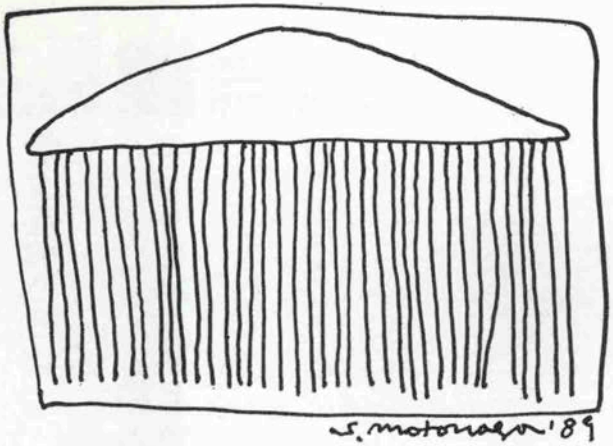
私は思わず噴き出したが、他人ごとではない。私の小説の売れないわけも、はっきり分った、と言うべきである。

ふうん、いまの若い人の感動のレベルは、この辺なのか、と納得していたら、ある新聞の投書欄に、六十何歳かの男性が、これを読んで「号泣した」、とあって、もう私は、完全に自分の感性が信じられなくなった。

正直言って、私はこの手の話が作品にされているのを読むのは嫌いである。昔の評価で言えば「三文小説」ということになるのかもしれないが、昔の「三文小説」の方が、よほど文学的感動はあった、と言うべきか。週刊誌の紹介によると、これはほとんど実話らしく、店の主人は、この子供たちの父親代りになって支えて来たらしいが、その感心な実話をけなしているわけではない。いや、けなしはしないけれども、その感心な実話の方も、好き嫌いで言えば、嫌いな方である。かと言って、私は、自分が決して情の剛い人間だとは思っていない。どちらかと言えば涙もろい方だ。芝居などで、分りきった筋書、同じ場所で何度も泣く。「忠臣蔵」でお軽が勘平の死を知らされて、ああ、私、どうしよう、と途方に暮れると一緒に泣くのである。「合邦ケ辻」で合邦が、自らが手にかけた娘の亡き骸を抱えて肺腑をしぼっていると、自分の涙も止まらない。

思うに私は理不尽な目に遭っている人に出会うと泣くようである。人間だけとは限らない、動物だってそうだ。先だって、三浦哲郎氏のエッセイのなかで、氏の近所の石神井川を見ていたら、川の真中を小さな箱のようなものが流れていく、箱のなかには、捨てられたらしい二匹の白い小犬がいて、無心にじゃれあっていた、とあるのを読んで、どっと涙が噴き出して来た。

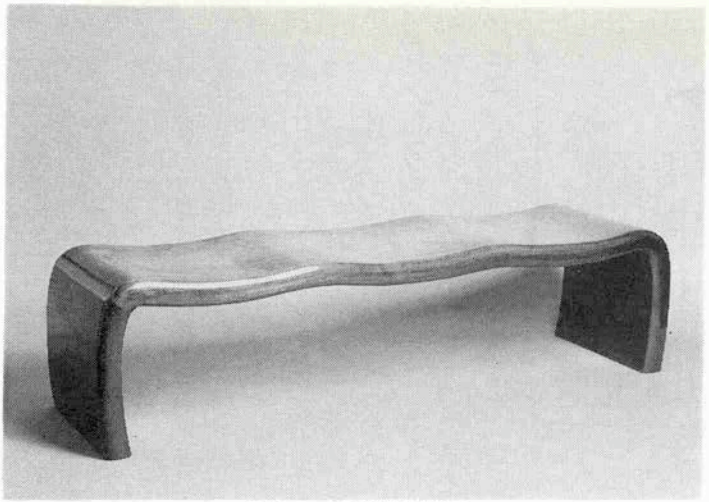
それ以来、私は会う人ごとにこの話をして「ねえ、どっちで泣く？　かけそば？　それとも白い小犬？」と質ねることにしている。「かけそば」と答える人には「そうねえ、やっぱり、こんなせち辛い世に、人情だねえ」と言って、それ以上の話はしないことにする。「白い小犬」と答える人には、こう言う。「私、思わず何かに祈りたい気持になってしまった。それより他に、この理不尽に堪えることができなかったの」そして、そのひとと一緒に、昔から文学は、この理不尽なものへの哀惜と、共感と、鎮魂のためにつくられていたのだ、と確認する。もちろん「いまどき、理不尽、ったって何のことか分らない人が多いのでしょうねえ」と溜息をつきながら、である。



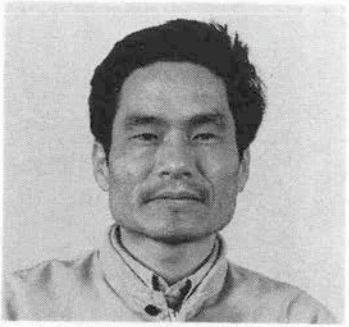
美術夜話〈6〉

「わが青春の神戸」

服部　守正
〈和家具作家〉



朝日クラフト展優秀賞受賞作品



新しい和家具と草木染紬の創造をめざして、住み慣れた神戸から信州に移り住んで早や十五年近い歳月が流れました。

この春は三年ぶりに二回目の個展（二人展＝三宮ダイヤモンドギャラリーにて）をなつかしい神戸で開くことが出来、また、皆様の暖かいご協力を得て大成功に終わることが出来ました。

その直前の五月には、大阪で開かれた「朝日現代クラフト展」で「波形ベンチ」が優秀賞に選ばれ、お客様や友人から、暖かい励ましやおほめの言葉をいただき恐縮しました。

十五年の努力が皆様のご協力とご指導によって何か形をなして来たように感ぜられる今日この頃です。

私が家具作家の真似ごとを始めたのは五年程前の或るお客様のお言葉がきっかけです。それはご自分でも木彫や焼物をなさる明石の西山先生（医師）が、

「服部さん、どんな家具でもいいから、あなたがこれが家具やというものを一度作って下さい。」と言われました。私は二年近い思索と構想を練り、材料を捜し、そのお話をいただいてから二年程たって品物を納めさせていただきました。それは松本の親しくしていただいている家具屋さんの先代のご主人の年期明けに作られたとい

う品物をモデルに作ったケヤキの茶ダンスです。この茶ダンスを初めて見た時、「これだっ」と悟り、ご了解を得て製作しました。

その時から私は和家具こそ自分の求めるものだと合点しました。新しい形、新しい色、それは自分の内から生まれるものを待ちますが、私のお手本とするのは純然たる和家具です。

それにつけても製作の合間に心に浮かぶのは美しい神戸のことです。

「どちらで作っておられるの?」

「信州の方で。」

「まあおうらやましい。」

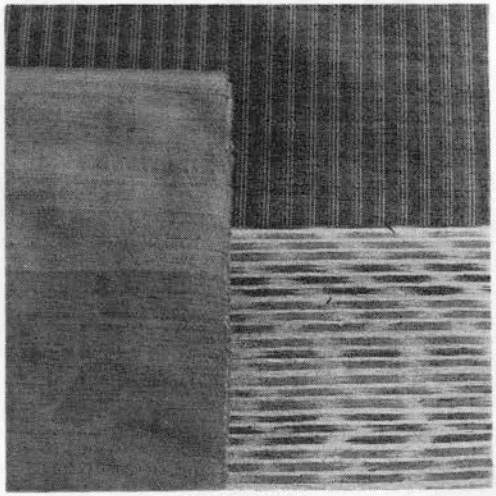
皆さんそうおっしゃいます。実際私共の住んでいる所は安曇野の南部、近くに上高地、美ケ原、穂高があり、又嫁さんの草木染に使う草木を取るには事欠かない大自然に恵まれています。また最近発見した大蜂高原などは北アルプスを一望出来る、しばらくはトンビに成ったかと思われるような名所があります。しかし信州に住んで十五年になりますが未だに信州にはなじめません。人も自然も私達にとってはきつすぎるのです。

愛すべき作品と共に（ダイヤモンドギャラリーにて）

神戸港で荷役の仕事をしていた頃、毎日電車から見た須磨の海や淡路島、ゆったりと流れる夕映えの空が私達の心を何度思い出に誘ったか数知れません。そこで出会った港の仲間、船内、検数、海事、倉番のおっちゃんに至るまで輝やいていましたし、人間として尊敬に足る人達でした。私は青春の最も多感な時を神戸で過し神戸で学びました。神戸には一級の人と文化がありました。

去年東京の銀座で二人の個展を開きました。又一度は外国でも発表したいと思っていますが、私達はあくまで神戸を主眼に発表して行きたいと思っています。

この「わが愛する神戸」に小さな店を持てたら、というのが私達の夢ですが、最近の土地の値上がりで、はかない夢に終ってしまうかもしれません。



久子夫人の紬の作品

住所／〒390－17長野県安曇郡梓川村倭515ノ12 ☎0263ノ78ノ4558

■対談■

ホテルとダンスと神戸と

青木　寅雄　VS　森　美代子

〈ホテルオークラ神戸　会長〉

〈日本ネオ・トロピカル協会　神戸ネオ・トロピカル協会会長〉

★本格的シティ・リゾート型、国際ホテルの誕生

森　ホテルオークラ神戸の開業おめでとうございます。

青木　ありがとうございます。おかげさまで工事は事故もなく予定より二週間早く出来上りましたので開業日を早めようというような意見もありましたが、開業を早めるより準備に十分時間をかけたほうが良いと考え予定通り六月二十二日に開業と致しました。

森　私は、前から神戸にホテルをお作りになればとおすすめしていましたので、私がお話していたから出来たのかなとか？（笑）大倉山は、大倉家が神戸市へご寄付なさったとか。丁度、メリケンパークはその真下の海辺ですねぇ。

青木　当初、坪内さん（当時オリエンタルホテル）がお建てになる予定になっていたのですが事情があって私どもと三井物産とのJVで、建てることになったんです。そして、神戸に「株式会社ホテルオークラ神戸」という別会社を作りました。

森　今、神戸はファッション都市、コンベンション都市、スポーツ都市、そしてウォーターフロント計画等、色々な形で活性化しているでしょう。この神戸に国際的に施設、料理、サービスともに評判の高いホテルオーク

森　美代子さん

ネオトロピカル協会会長。

昭和1年神戸市生まれ、武庫川高等女学校卒。昭和42年「音楽と舞踏」創刊、同47年日本女性ドライバー連盟会長。主な受賞歴は、昭和47年日本女性ドライバー連盟会長として警視庁より感謝状、同53年日赤より感謝状と銀盃、同54年内閣褒章条令により内閣総理大臣より褒状、同56年紺綬章、同60年、日赤より感謝状と銀盃、それぞれ授与される。一男一女の母、音楽一般が趣味。

ラさんが出来たということは、京阪神地区にとっても国際都市として今後の発展に大変プラスになると思います。

青木　ありがとうございます。当初、亡くなった野田（昨年十二月死去された野田岩次郎名誉会長）の故郷が長崎だったので、そちらへホテルを建てようと言ってたのですが、こちらにご縁があって先に建てることに決めたんですよ。人的な面では、幸い東京のホテルオークラには中堅以上の人材がたくさん揃っており、これらのベテランがこの神戸に来て力を発揮してくれることが、その後の若手養成のためにも必要なことなんです。昔から「のれん分け」というのがありましたようにね。

神戸の次は今年の十二月開業予定の上海があります。グァムも敷地五千坪広げ、二万坪の敷地にハワイのハレクラニホテルを設計した人に頼んで増築工事を進めています。グァムホテルオークラのイメージを最初「五月の風」といった爽やかなホテルの設計をと頼んだら、そんな注文は初めてだっていわれましてね！　そこで、判りにくいかと聞いたら、いや、非常によく判りますって言ってましたよ！（笑）

神戸にホテルを作ると決めたとき、基幹産業のご三家が沈滞気味なのに何で神戸に作るんだっていわれましたが、私は、いやそうじゃない、大きい組織は、経営のノウハウと人材と組織があるから、そう簡単にへこたれないと考えていました。今、再び盛り返してきており、また、神戸市一四〇万人市民と芦屋・西宮両市で五〇万人、合計二〇〇万人の人々の生活があるのは、大きな経済だと思います。神戸は、地形的に瀬戸内海をひかえたリゾート地でもあり、シティホテルとして、また、マリーン（海）も楽しめるリゾートホテルとして、そして、京都、大阪を背景に国際ホテルとして十分やっていけると思います。

森　神戸は外国人が好む街ですものね。

青木　国際的なコンベンションもいけると考え、思いきり大きい宴会場「平安の間」（2千人収容）を作りました。

この「平安の間」の壁面は、つぎ色紙の手法で人間国宝の田中親美さんの血をひく大貫泰子さんにお願いし、

青木　寅雄さん

明治35年生まれ。昭和2年慶成義塾大学卒業。野村鉱業社長、野村建設工業取締役等を歴任後、昭和47年㈱ホテルオークル代表取締役社長、48年㈱ホテルオークラ・エンタープライズ代表取締役社長、同50年大倉観光㈱監査役、同56年㈱コンチネンタルフーズ代表取締役社長、㈱ホテルオークラ・エンタープライズ代表取締役会長、同61年㈱ホテルオークラ神戸代表取締役、平成元年3月㈱ホテルオークラ神戸代表取締役会長に就任、現在に至る。

平安時代の四季を彩る自然美を女の人らしい優雅ないい線で表現していただきました。それから、ホテル正面ロビー、宴会場ロビーの2カ所でお目にかけます平山郁夫先生の作品は、実は3年ごしなんです。当初、ホテルのこの場所とこの場所に絵を飾りたいのでお願いにあがったのですが、何も仰言らなくて、私は、ホテルは三〇年、四〇年ではなくて世紀で考えて下さい宜しくお願いしますと申し上げたところ、それじゃ描こうと仰言っていただいたんです。

出来上がった作品は、昨年の院展に出展されたもので、先生から、青木さん出来たよってご連絡いただき作品を拝見して驚きました。亡くなった野田がこの作品をみて、絵の前に40分も立ったまま感心して「大変、素晴らしい。神戸でなく東京（のオークラ）でもらおうか」といわれたのであわてて「そんなことはできません」と言ったら「一、二年神戸に貸しておくから、その後は東京に持って来てほしい」って言ってましたよ。(笑)。

先日、竣工式には平山郁夫画伯ご夫妻におでましいただき、ご夫妻で除幕式をやってくださいました。その時、松原に飛んでいる千鳥が平山先生のお歳の数、58羽いるって仰言ってましたので、じゃあ来年になったら一羽ふやさなきゃって笑ったんですよ（笑）。

そのほか、施設の特色としては、広大な日本庭園と渡り廊下でつながる和食堂の離れは、大変風情がありますね。お茶席も、ご流儀に関係なくご利用いただけるように、お花は色々ありますが神戸出の小原流でといろいろ工夫いたしました。

森　神戸ネオ・トロピカル協会で、7月29日にホテルオークラ神戸で大舞踏会の夜会を開きますので、今から拝見するのが楽しみですね。

青木　ええ、楽しみにいらしてください。海もすぐ近いですから、六甲の山並みと神戸の街と四方が見えて絶景ですよ。瀬戸内海のリゾート時代に先駆けて、淡路に明石架橋もゆくゆく出来ますし、フランス革命2百年記念に平和のシンボルを淡路に立てるそうですよ。

森　そういえば、メリケンパークの映画記念碑も、ホテルオークラさんが、メリー・ピックフォードのスタストーンをお決めになって、神戸ネオ・トロピカル協会が、彼女のご主人ダグラス・フェアバンクスを決めたんです。今、映画記念碑は若い人たちの人気の的だそうですね。そのすぐそばにホテルオークラ神戸が建っているというのもいいですね。

青木　日本庭園のすぐ裏側の海洋博物館もホテルが出来上がってみると、ホテルからの眺めは帆船のようでいいですね。アーケードは、三越、大丸、そごうの三店が高級ブランドのお店を出店します。

将来は、ポートアイランドの先に空港ができ、そこから高速艇で行けば、関西国際空港も、沿岸ルートを車でより早いですからね。

森　東京から見ましても、客観的に、神戸はこれから伸びるだろうなと思いますものね。今まではどうもスマートすぎて弱いという感じがありましたが、今は、株式会社神戸市さんで、お商売もお上手になって逞しくなってきましたもの。ホテルオークラ神戸も、ここへ建てたことが先見の明があったといわれるようになると思いますわ。

★ダンスと都々逸は同じだ〝間〟が合えばいい

青木　私も昭和2年から大阪、神戸にご縁がありましてね。昭和8年頃、当時ダンスが流行ってましてね。

森　青木さんはダンスがとてもお上手ですもの。

青木　私は、ダンスなんて！　という硬派だったんですよ。おかしな話がありましてね。尾籠な話なんですけれど、ちょっと痰に血がまざっているって、友達に話したら内科の専門医に診てもらえって言うもので診てもらったら、肺門リンパ腺炎だっていわれて。スポーツはラグビーをやってたのですが、その医者に止められ、ダンスぐらいならいいでしょっていわれてね。

その時、友達が教えてやるからって、友達の家に行っ

て教わったんです。

森　お相手、パートナーは？

青木　パートナーはなしですよ（笑）。そして、のんきなもので、少し踊れるようになったからといってダンスホールに行ってわけも判らず踊ってましたよ。当時、ダンスホールは、大阪に無くて兵庫県の尼崎（大物）、宝塚、西宮、神戸にありました。そのうち私は、慶応ですからKOクラブへ通ってダンスを習いました。クラブには、ダンスが流行しだしたので先生が教えに来ましてね、おかげでチャチャチャなんかも踊れるようになったんですよ。

考えてみると、ダンスは「間」さえ合っていればいいんだなぁと思い、こいつは都々逸みたいなもんだなぁ都々逸も「間」さえ合ってりゃいい（笑）ダンスと都々逸は同じ様なもんだ（笑）って言ったら、先生が帰っちゃいました（笑）。

森　そんな、面白いこと言う方いないですもの（笑）。

青木　当時は、宴会があっても女将やお客さんが途中で地下室へ行ってしまう、そこで、ダンス（笑）、まだ私は、踊れなくてじっと見ていてもつまらないので、ダンスを始めたと言うこともあります。

森　当時、おしゃれな方は、皆さん踊れたんですね。

青木　大阪を振り出しに、タイガー、パレス、尼崎、西宮、宝塚、神戸と軒並ダンスホール巡りをしました。踊れるようになってからは、毎日毎日（笑）神戸の花隈だとかソシアルだとか。

森　随分この界隈を荒していらっしゃったんですね（笑）

青木　この前、花隈の松迺家でおかみが、この空いているところが花隈のダンスホールで、私の子供の頃よくのぞいてましたって（笑）。宝塚のダンスホールが、良かったですね。年中、毎日の様に行っているとチケットを買わされるんですよ。

それで、珍談がありましてね。長女が、昭和12年12月24日のクリスマス生まれなんですよ。家内が病院に入院し、お袋も東京から来ていてね。ところが、その日、野村さんに呼ばれまして都ホテルへ行ってたんです。そこへ、河合ダンスの連中が来ていたので一緒に踊って、それじゃ、今日は長女が生まれたので早く帰らなきゃいけないので失礼しますと言って外へ出て、もう一人の友人と大阪へ帰り、パレス、尼崎の大物、西宮、ガーデンへ行って、神戸に入り、ソシアル、花隈のダンスホールを出たら夜が明けてきた（爆笑）タキシードかなんか着

「ダンスと都々逸は同じ……」とユーモアたっぷりの青木さんと森さん（ホテルオークラ／ラ・ベル・エポックで）

て、すまして家に帰ったらお袋に叱られました。足から血がでてたんですよ（笑）。

森　まぁ！、凄い（笑）。

★心の通うサービスで、お客様の引き立て役を

青木　その頃、新しいダンスのステップが英国のダンス雑誌に出ているので、それを取り寄せ自分で新しいバリエーションをやってみる。ダンスホールの先生は知らなかったけれど、僕は、ちゃんと踊ってましたからね。

森　まあ、何でも徹底しておやりになるんですね。

青木　それから今度は東京へ出てきますとフロリダへ行って、そうするとそこに関西からダンサーが交流があってきているんですよ。「おい、いつきたんだ！」って調子で踊って、ギリギリまで踊って東京駅へサーッと滑りこんだら、汽車が出た後だった（笑）家にやっと帰ったらダンサーの娘達の香水が洋服についてプンプン匂っているの（笑）東京のダンスホールをあちこち行っていたら、新潟に伊太利屋ってのがあるよ。知らないって言ったら、じゃ行って全部まわろうですよ（笑）。大阪在勤の時、前のＴＢＳの社長が、大阪商船の課長をしていました。彼と仲良しで四、五人で船で別府へ行ったんです。あそこはダンスホールが多いの（笑）それを端から歩いて「明日はゴルフがあるのにいい加減にしようよ」といいながら回って（笑）。

森　別府温泉だから芸者さんが多いのかと思ったら、ダンスホールが多いんですか。

青木　次は満州で、経済調査なんですがね。大連から、奉天、新京、ハルピン。夜十時からキャバレエがあるんですよ。そこへ行くとロシア人のダンサーがいる。きれいなんだけどスラブ系なので、とても大きいんですよ（笑）。そうかと思うとチェコ系のカチューシャという子がいました。きれいなんだけど英語も日本語もダメだから話が出来ない。ただ踊っているだけ（笑）。

森　まあ、青木会長のダンスは国際的ですね（笑）。

青木　他に、小さな店も廻って見ましてね。そこから、湯崗子（とうこう）温泉へ行って。昭和九年頃だから日本が凄く良かった頃で、そこで泊ったら、そこにおかみさんがいて、きれいな、おとなしいお嬢さんがいて。撫順でダンサーしていた娘が可愛いので養女にして連れてきたというんです。誰も泊っていない広い温泉場で、地下の方からダンスミュージックが聴えてくるので、ひょこひょこ降りて行くと、そこにお嬢さんがいて「踊っていただけますか」っていうと「じゃあ」といって踊って。可憐な人でしたね。どうなすったか……。

森　いろんな想い出がおありですね。

青木　ええ、そんなつけたしもありまして…。

森　あら、つけたしだなんて（笑）。

青木　それから日本へ帰って来て、あちこち廻って。そのうち私のダンスは、いよいよもって都々逸になってきちゃった（笑）。

森　どうしてですか。いよいよもって、お上手になって。

青木　いや、いよいよもって都々逸になった（笑）それでソシャルダンスはやめました。最近は、韓国のソウルへホテル進出を考えてて行ってみると、ソウルのホテルじゃディスコがないと一流ホテルじゃないって言うのです。私は行ったことがなかったので、あちこち連れていってもらいましてね。踊って見たけれど、これが又、都々逸（笑）。身体をリズムに合わせて動かしてりゃいいので、こいつあ簡単だよって（笑）すぐ先生になっちゃって。皆が、踊ったことがないっていうので「おれの後について来い」って（笑）。行って見ると若い人ばかり。おじさん間違って来たんじゃないかって顔で見られちゃって。それから、ソウルのホテルも大きなディスコに改装しました。奥がメンバー制で、メンバーの第一号は私だって、授与式があって困ったけど、まあいいかって踊ったけどハミ出しちゃった（笑）。キーセンパーティへ行ったら唄を歌うのですが、私は歌えないので、一寸踊ってごまかしているんです。

森　まあ、それだけ徹底して〝遊ぶ〟のも素晴しい。

青木　考えてみりゃ遊んでばかりいましたね。京都大学の松岡っていう有名な教授がヨーロッパから帰って来て、ドク、ドクって呼ばれていました。「ドク、おれ肺病で肺門リンパ腺なんだ」ってというと、病気ってのは100人のうち何人かはかかってる。肺門リンパ腺災くらい出なきゃ、かえって死ぬんだ。それじゃ医者に「計られたな」っていったら、どうやら芝居だったらしいんですね。その時に計った奴は死んでしまって。一緒にその頃遊んでた奴らも死んで殆どいませんね。だって僕の年で、デイスコなんかへ行く馬鹿いませんものね（笑）。

森　青木会長は、昭和初期に神戸へお住いだったので？

青木　大阪です。まあ神戸も一緒みたいなもんで…。

昭和二、三年頃だから阪神国道が出来ていない。心斎橋でタクシーを摑まえて、往復いくらだってとやって、二、三人でダーッと神戸へ行ってダンスを踊って帰るんだから、前世紀の話で（笑）だからダンサーの結婚祝いを何人かにあげましたよ。コンパクトですよ。いい娘だなと思っているのに、五、六人いたから、皆同じに…。馬鹿な話ですよ（笑）。森さんの父上も神戸にいらっしゃったんじゃないですか？

森　神戸で、大正の初めに、クラシックのシンフォニイの指揮を初めてオリエンタルホテルでやったんです。その頃、服部良一先生も私の父のところにいらしたんです。先生はその頃、ダンスホールで音楽をやっていたとおっしゃっていました。

青木　東海林太郎っていたでしょう。「国境を越えて」が、昭和初期です。

森　景気の悪い頃ですね。

青木　昭和四、五、六年頃ね。大正末期に「枯れすすき」が流行って。あんなヘンな歌が流行るから大震災が起こるんだと言われたことがあります。

森　若い頃、ダンスをなさってた遊びの感覚は、ホテル業に生かされていますか？

青木　いや、余り関係ないですな。ホテルマンの仕事はあらゆる産業のなかで一番地味な仕事なんです。

森　一番派手にみえますけれどねぇ。事業としては、誰でも、最後にホテル業をやりたいと申されますでしょう。それぐらい夢があるようですが？

青木　ホテルマンの仕事は、主役は舞台の上の役者衆であるお客様で、舞台の下や裏方のスタッフの仕事がホテルマンの仕事なんです。特に、サービスは目立っちゃいけない。お客様が何かを欲しいと思われるときに側にいて、お客様がして欲しいと思われることをして差し上げなければならない。自分が出すぎちゃダメなんです。

Always on the way, but out of the way

我が出ちゃいけない。これは、出来そうで出来ないことなんですよ。だから、気が疲れますよ。それが好きだというのは別で、まあ、キツイ商売ですよ。

私は、昔から論語が好きで、孔子の弟子に子貢という人がいて、ある時、孔子様に一生を通じて守って行く言葉は一言で云うと何と云う言葉でしょう？　と伺ったところ、孔子様が、それは「恕」と云う言葉だと諭された。これは、「いたわり」、「思いやり」と云う事です。

森　「恕」いい言葉ですね。

青木　いたわる心は、見えないところでしなければいけない。見えちゃいけない見えないように、見えないように影でやる。影に徹する人でないと出来ない難しい仕事です。例えば、お客様にお皿を一枚さっと出す場合でもそこにサービスする気持ちと心がこもっていなければ、何にもなりません。ただただしくても、一生懸命「親切にする心」が根底にあれば、お客様に許していただけるんですよ。

森　形だけではダメだということですね。気持ちがこもらなければ。

青木　人に接するということは「あたりまえ」のことなんですがね。

（ホテルオークラ／ラ・ベル・エポックにて）